

『図書室ノ恋～小声でめぐる一人のページ～』

【登場人物】

富森 花撫（みやもり かなで）

空之音女子高校二年生。

あなたのクラスメイトであり恋人。
同じ図書委員として活動している。

お淑やかな印象のある少女であり、
成績優秀、品行方正で周りからの評価も高い。
その反面、あなたに対しても子供っぽい姿を見せ、
図書室でもイチャイチャしようと隙を窺っている。

『年齢』 16歳 『身長』 156センチ
『血液型』 A型 『バスト』 B

【あらすじ】

あなたは、空之音女子高校に通う二年生。
同級生で、同じ図書委員の花撫とは、
付き合い始めたばかり。

季節は秋。図書室を舞台に、こつそり手を繋いだり、
一緒に宿題をしたり、本を交換して読んだり……。
花撫と静かに恋を育む時間が流れる、
色取り取りのシチュエーションがここに。

ページをめくるように少しずつ進んでいく恋のひと時を楽しむ音声作品。
あなたも花撫と一緒に、図書室での学校生活を過ごしてみませんか？

【INTRODUCTION：図書室への扉】

○廊下・朝（図書室の前）

朝早い時間帯の学校。登校のピークタイムではないため、部活の朝練で登校している生徒が少人数いるものの、騒がしさはなく、校舎内には静寂を感じる時間が流れている。

あなたは図書室の扉の前でひとり、花撫がやつてくるのを待っている。

「おはよう。

相変わらず朝、早いね」

「ゆっくりでよかつたのに。

今日、私が鍵当番なんだし」

「（話を聞いてリアクション）……うん」

「あー、うん。私も。

朝の誰もいない図書室の空気、好き」

「わかる。職員室まで鍵取りに行くの、めんどくさいよね。先生も、図書委員に預けてくれればいいのに」

「そしたら、いつでも好きな時に来れる。
いつでも、好きな時に、二人で：」

「（呟くように）……大変だあ」

「ん？ どうしたの？
何か変なこと言つた？」

「ふふつ。

……ねえ、知つてる？ 図書室の噂」

「なんでも、こつそり逢引してるカップルがいるつて。一体、誰と誰が、そんなことしてるんでしょうね？」

「聞いたことない？」

……まあ、そうかもね。

今、私が考えたから」

「ふふふつ。

さあ、今日も一日、図書委員の仕事、頑張りましょう。

……よろしく」

花撫とあなたは、図書館へと入つていく。

【EP01：図書委員　日常　カウンターで繋ぐ手】

○図書室・カウンター（放課後）

ある日の放課後の図書室。

あなたと花撫は、隣り合わせで図書室のカウンターに座っている。
花撫は他の生徒の対応をしている。

「……あ、はい。

本の貸し出し、はい、ありがとうございます。
こちら、二冊ですね」

本のポケットから貸出カードを取り出して

「貸出カードにお名前、お願いします。
(書き終わったものを受け取って)

ありがとうございます」

「判子は……、

(あなたに向かって) あ、そこにあるの、取れる?
(これ?という反応に対して) そう」

花撫、判子を受け取って

「ありがとう。

(判子を押して) ……はい。

お待たせしました。

返却期限は来週になりますので……。

はい、よろしくお願ひします」

生徒を見送つて、花撫、こつそりあなたに話しかける。

「……ねえ、見た? さっきの本。

うん、二冊ともオススメコーナーの」

「うん、昨日の放課後、並べたばかりだったのに。
……ふふつ、私たち、センスさすが」

花撫、貸出カードをケースに入れ、机の上を整理する。
花撫はあなたのことを見つめている。

「（あなたをみつめてため息、声になりすぎない）……はあ……」

花撫、あなたと目が合う。

「……あつ。えーっと……。

（小さい声で）何、読んでるの？ 今」

「（何を言つてるかわからなかつたというリアクションを受けて）
……え？ あー、ん、だから……」

花撫、椅子から立ち上がり、あなたに近づく。

「（耳元で囁く）何読んでるの？ って、聞いたの」

「あ、そのシリーズ。

もう四巻まで読んでる、早い。

あと少しで追いつかれちゃいそう。

私、今、六巻の途中で止まつてて……」（楽しそうに）

「……あ、ごめんなさい。集中してた…、うん、そうだよね？」

「そんな目でみないで。

……わかってる。

私も、本読んでる時に話しかけられたくない派だから」

「んー……目があつたから、つい、話しかけちゃつた。

……視線、感じた？

うん、だつて、見つめてた」

「……はい。静かにします。
……静かに、見つめます」

息遣いが聞こえるくらい近い距離で
あなたをじつと見つめている花撫。

「……ん、なに？ どうかした？」

もう、ちょっと静かにしてください（ふざけて）

「……ふふつ、近い？ そんなことない。

このくらい普通普通。恋人の距離」

「（笑いながら） そう。恋人だから許されることってあるの。
知らない？」

「誰も気にしないって。
ほら、周りみて？」

みんな、本を読んだり、勉強したり、寝てたりしてる

「……いい？」

私たちは、今、図書室のカウンターで、
図書委員として仕事をしてる。

今は、ちょっと手が空いたから、
一緒に本を見てる。それだけ」

「別に普通。なーんにもない……」

「（しばらく間があつてから） なんにもない……ほんと」

「……あ、もうこんな時間？
受付、交代しましようか」

椅子から立ち上がり、座り位置を入れ替わる。

「今日、残りの仕事は……そんなにないかも。
あとは、閉館前に借りる人がいるかどうか」

「あ、待ってるの退屈とか思ってない？」

「本の続きが読みたいんでしょ。
顔に出てる。」

「うん、わかりやすい」

「受付担当なんだから、お仕事してくださーい」

「……私？ 私は何するか……。」

「んー、本の続きを読むか、宿題をやっちゃうか……」

「でも、今からだと時間的にはどっちも中途半端か」

「……じゃあ私は、

ちゃんと仕事してるか、見張つておくことにする」

しばらくして、花撫、指で机を軽く叩いて、
あなたの気を引こうとする。

「……ん？」

引き続き、指で机を軽く叩く。

「え？ なに？」

引き続き、指で机を軽く叩く。

「気になる？」

「……ねえ、ねえねえ。

手、貸して？ いいから。貸して？」

「……しーつ、静かに」

「(花撫、あなたの手を握つて) ……捕まえた」

「……私と手、繫ぐの、嫌?」

「(あなたに言わせるように) ……嫌じやないですか? うん、知つてた」

「……邪魔してるといえば……してる」

「……ふふつ、恋人つなぎ。
……はじめて」

「……もうちょっと下で繫ご?
カウンターの下で……そう。
万が一、ね?」

「ふふふつ……あつたかい」

「……見た目より意外と大きい」

「全然違うかたち。不思議……。
すべすべ、ふふふつ。
ずっと触つてたい」

「(深呼吸して) ふうー……」

「汗、かいちやつてるかも。
……離す? 離さない?」

「……離さない」

「(手を解いて) あつ、そろそろ、閉館時間。
人くる、離すね」

「（息を吐いて） はああ……。
なんか、喉乾いてきちゃった」

「……で問題です。私が飲みたいものはなんでしょう？」

「ヒントは……。

あっ、すぐ当てないでよ。つまんない」

「そう。最近、ストロベリーのしか飲んでない。
帰り道、また寄つてもいい？」

「やった。……あっ」

花撫、こつそりあなたに伝えるように

「（耳元で囁く） ……手、またあとで繋ぎたい」

【EP02：宿題 勉強 一人で解く時間】

○図書室（放課後）

「……うん。……うん。

あつ、前に話してたの。

今日発売だつけ？」

「あー……。

そうね……。図書室でも読めるようにしたい」

「じゃあ、アンケート、書いてみる？」

「私、先生に気に入られてるし、
たぶん、なんとかなる」

「自慢じゃない。

」ういう時、立ち回りやすいように良い子やつてるの」

花撫、アンケート用紙に記入を始める。

「（書きながら呟くように）えー……。

本のタイトル……

……出版社と……作者の名前が……

……推薦理由……。

……話題作であり……学びにも……」

「名前……二年、みやもり……かなで」

花撫、アンケート用紙を箱に入れて

「よろしくおねがいします」

「そういえば、明日の宿題やつた?
数学の……」

「そう、プリント。

この前、授業終わりに配られた……」

「その顔何? 今、思い出したの?
もう、本以外のこと、興味ないんだから」

「……しようがない。

じゃあ、やつちやいましょ。ここで「

「こういうので平常点稼いどく」

カバンを漁つて、プリントを取り出す。

「……えーっと。たしかこのファイルに……。
あつた」

「大丈夫そう?

……三枚ある?」

「わからないところあつたら教えるから。
いつでも聞いて」

あなたと花撫、プリントに向かって記入を始める。
しばらくしてあなたは、花撫に質問する。

「……ん? どうかした?
……わからない?
みせて」

「あー、それね。
……私もさつきわからなくて」

「教科書のここ、わかりやすいよ。
……複雑にみえるけど、
この公式を使うと……。
そうそう！」

「どう？ いけそう？」

「よかったです。

……ん、結構進んでる。いいペースね」

「私も、あと少しで終わりそう。
最後まで頑張りましょ」

再びプリンントの問題を解き始める。
しばらくして、解き終わりペンを置く。

「(独り言のように呟く) おわったー。
(身体の伸びをして) んー……」

花撫、あなたのプリンントを覗き込む。

「……お、最後の問題まで行ってる。
それ、結構難しいよ？」

「うん、さっき終わった。
……だーめ。答えは教えない。
そこまできたなら多分わかる」

「ちょっと何？ 頭抱えたふり？」

「ほーら、あと一息」

あなたが問題を解いている様子を
花撫が覗き込んでみている。

「……うんうん。

そうね」

「あつ……。

なんでもない」

「ふふふ、なんでもないって。
続けて」

あなた、問題を解き続ける。

「……なに？ こっち見て。

……解けた？

（回答をみて）えーっとね……あー……多分、間違ってる

「んー……。

ちょっとこの辺りの余白、使っていい？」

花撫、あなたのプリントの余白に式を書く。

「こ」の式で、代入する数字が……」

「あつ、わかった？

そこが違つてただけ。

……うん、途中式はあつてた。

考え方は間違つてない」

「この後は、自分で解く？

うん、頑張つて」

あなた、プリントの問題を解き終わつて、ペンを机に置く。

「……はい。お疲れ様。

……うん、最後まで自分でやつて偉い」

「あー、もう、こんな時間。

……今日はもう誰もいないし、帰ろ」

「……あ、帰り、駅前の本屋寄つていかない?
さつき話してた本、欲しいでしょ?」

「えっ、今月そんなに買ったの?
さすがに買いすぎ」

「んー、たしかに、表紙見たら欲しくなっちゃうけど。
……あ、それなら」

花撫、財布の中を探して、図書カードを取り出す。

「……はい。これ。図書カード。
余つてたから、あげる」

「いいのいいの。

あっ、でも、タダあげるのは……。
(あなたを伺うように) ちょっと……ふふっ、ねえ?

「じゃあ、可愛くお願ひして貰おうかなあ?
……恥ずかしい?」

「えー、一回だけ、一回だけでいいから!
本、欲しいでしょ?」

「ふふふっ。すっごく可愛くお願ひします!
はい、アクション!」

「(喜んで) ふふっ……もっと

「（催促して）もつと」

「……大好きな花撫ちゃん、つてつけて？」

「あ、今……すゞくよかつた。
もう一回、お願ひ、録音していい？」

「冗談だつて。

……でも、すゞく幸せで、
ずっと聴いてたくなつたのは本当」

「ちょっと待つて。顔、真っ赤！
……もーう」

花撫、あなたを抱きしめて

「（耳元で囁く）……はいはい。よしよし」

「……可愛かつた。

……うん、すごく。可愛かつた」

【EP03：雨 ラベル貼り 本棚に囮まれて】

○図書室（放課後）

雨が降る図書室。

二人は机を挟んで座っている。

「……じゃ、いくよ」

「最初はぐー、じゃんけん、ぽん。

あいこで、しょ。

あいこで、しょ。

……しょ！……しょ！」

「（あいこが続いて面白くなり）ふふふ、あいこでー、しょ！

あつ、負けた」

「じゃあこっちの山が私。
そつちはお願ひ」

「ラベルのシールは、ここにまとめてるから。
背表紙の下の方に貼つて」

「あ、あとこれ、リスト。

タイトルと分類と番号、照らし合わせながらやつてね。

……うん、わかってると思うけど、一応」

本の背表紙にラベルを貼つていく。
本を取つてシールを貼つて積んでいく。

「慌てず、ゆっくりやりましょ。
間違えると大変だから」

「……もー、笑わないで。

あれ、思い出したんだでしょ？」

「私がデータ打ち間違えて、ラベルの番号がズレてた話。

……ちょっと、からかわないで」

「あれはいつ頃……。

……あー。そうね。

期末テスト前だったから、六月末かな」

「夏休みに向けて蔵書増やしてたし、処分した本の番号も混ざっちゃって……」

「どうかしてた。本当に。あれだけのミスってほとんどしたことないかも」

「…おかしかったの、あの時は！」

誰かさんが、私の告白、保留するから」

「それは、まあ、

告白されたことなかつたって聞いたけど……」

「まあ私も、告白自体、はじめてだつたんだけど

「えー？」
だつて……えー、……好きになつちゃつたんだもん。
ダメ？」

花撫の分が終わる。

「はい。私の分はおしまい。

そつちも……。

(様子をみて) うん、うん。大丈夫そう

「じゃあ、本棚に入れましょ」

立ち上がりつて、本を抱えて移動する。

○図書室・本棚

あなたは本を持ち、花撫が本棚に本を入れていく。

「……えーっと、『ウ』の20番台だから……。
あ、その本ね。貰つていい？」

花撫はあなたから本を受け取る。

「……ありがとう」

「うちの学校の本棚、木造りなのいいよね。
あつたかい匂いがする」

花撫、本を受け取つて本棚に入れていく。

「私、新しい本を本棚に入れていく感覺、好き。
大切なものが増えていくみたいで」

「……うん。

家の本棚とはまた違う。図書室のは」

「うん、誰かに見つけてもらうために選んでる。
普段、手に取らない本と出会えるのが楽しい」

「……たしかに。

本のおかげで世界が広がつて、
私たちも出会つてるし」

「あ、この本は……上の方に入れない。」

（少し考える間があつて）

ちょっと、登つてもらつてもいい？」

「だつて私より身長高いでしょ？ お願い」

「小さい台を引つ張つてきてその上に登るあなた。」

「私、下で支えてるから」

「……変なこと？」

「何言つてるの？ そんなことするわけないでしょ？」

「早く登つて？」

花撫、あなたを抱きしめて

「（ニヤニヤしながら）……あれ？ どうしたの？ 固まって。」

「私、支えてるだけよ？」

「本を入れるのは、一番上の端の方」

「……え？ 支え方？」

「何かおかしい？」

「……変だなあ。」

「私は、倒れないように、ぎゅつとしてるだけなんだけど……」

「ふふふつ、はははつ。」

「いや……ふふふつ、（笑いながら）ごめんなさい」

「外からみたら私、今スカートに顔を埋めてるんだと思つたら、おかしくなつてきちゃつて……ふふふつ」

「うん。逆に危ないよね、そうよね」

「だつて……抱きしめたかったの。合法的に」

「はい。ちゃんと支えます」

本を入れて、台を降りるあなた。

○図書室

時間経過。作業が終わつた二人。

「……雨、まだ降つてる。

途中でやむかなと思つたけど」

「え、傘?

あ——。どうして?」

「ふふつ、

(ちよつと自慢げに) 私、持つてきてる

「朝、天氣予報で言つてたから。
全く、そういうところだよ?」

「本、濡れたら嫌でしょ?」

「ふふふつ、そういうところ抜けてるから、
私と相合傘で帰ることになる」

「……うん。一緒に帰りましょう」

○図書室

「今日、何読むか決めてる?」

「あ、特に?」

「……もしよかつたら、これ、読んでみない?」

花撫、鞄から本を取り出して渡す。

「この前読んだ本なんだけど、多分好きだと思って。心理描写が丁寧で、言葉が綺麗で」

「実は、貸そうと思って、ずっと鞄の中に入れてた」

「……え? 私にも? 貸したいの?」

あなた、鞄から本を取り出して渡す。

「あっ、それ! 気になつてた。

「……うん、文庫になるまで待とうかなつて思つてたんだけど。貸してくれるの?」

「ありがとう。

じゃあ今日は、お互いに交換ね」

二人で読書をしている。

本を読んでいてリアクションで

時折、小声で、花撫の声が漏れてくる。

「ごめんなさい」(小さく呟くように)

泣いた花撫があなたに声をかけてくる。

「……ねえ、ねえ。

ごめん、ティッシュかハンカチ持つてない？」

あなた、ポケットからティッシュを出して、花撫に渡してあげる。

「……ありがとう」

「（ティッシュで涙を拭く／アドリブでお願いします）」

「（涙が収まって）ありがとう。もう大丈夫」

「んく」（読書を終えて身体を伸ばす）

「（目があつて）……ん？ 読み終わつた？」

「さつきは、ありがとう。

泣いちゃつた……。

なんか、ぜんぜん止まらなくて……」

「……はあ……。

すぐかつた。

もう、（何か言いかけて言えず）はあ……。

……よかつたあ」

「……そつちはどうだつた？

……うん、あ、ほんとに？

ねえ、言つた通りだつたでしょ？

……うん」

「どうする？ 外出る？」

「……わかつた。

出たら感想戦しましょ。

話したいし、聞きたい」

○図書室（放課後）

「（ため息をついて）……ふう。
ん？ なに？」

「え？ 顔むくんてる？ やだ」

「疲れてる？ 私？」

「……あ、まあ、そうね。
んー、疲れてるというより、緊張してる、かも」

「そう。今週末なの、朗読会。
人前で音読するなんて、
国語の授業以外ないし」

「……うん。 そう。

自分から立候補したんだけど……。
本番、上手くできるかなって」

「……きっかけ。

（考えて） あー…

「私、お母さんの落ち着いた声で眠るのが好きだったの。
子供の頃、寝る前によく読み聞かせをしてくれて」

「……うん、一人っ子。

妹いたら私、絶対読み聞かせしてた」

「いつか私も誰かに本を読んであげたいって思ってたから。
良い機会かなって」

「……え？ 今？ 何でも？」

「……聞もたい？」

「……うん、聞いて欲しい。練習したい」

「本、取つてくる」

花撫、あなたの傍を離れ、朗読用の本を取つてくる。

「……お待たせ。

まだ誰にも聞かせてないから、
はじめてのお客さんね」

「（喉を整えて） んへ、ん！
(息を吐いて) ふう……」

「それじゃあ、聞いてください」

以降、朗読パート。

※引用：青空文庫『壁の銀鏡』（著者：グリム兄弟 楠山正雄訳）

https://www.aozora.gr.jp/cards/001091/files/42316_15930.html

※朗読用に多少の漢字変換や整理を施しておつまむ。

『星の銀貨』

むかし、むかし、小さい女の子がありました。
この子には、お父さんもお母さんもありませんでした。

大変貧乏でしたから、

しまいには、
もう住むにも部屋はないし、
もう寝るにも寝床がないようになつて、

とうとうおしまいには、
体につけたものの他は、
手に持ったパンひとかけきりで、
それも情け深い人が恵んでくれたものでした。

でも、この子は、心の素直な、信心のあつい子がありました。
それでも、

こんなにして世の中からまるで見捨てられてしまつてしているので、
この子は、優しい神さまのお力にだけ縋つて、
ひとりばっち、野原の上を歩いて行きました。

すると、そこへ、貧乏らしい男が出て来て、

「ねえ、なにかたべるものをおくれ。おなかがすいてたまらないよ。」
と、言いました。

女の子は、持っていたパンひとかけ残らず、
その男にやつてしましました。

そして、

「どうぞ神さまのおめぐみのありますように。」

と、祈つてやつて、また歩き出しました。

すると、今度は、子供がひとり泣きながらやって来て、

「あたい、頭が寒くて、氷りそうなの。
なにか被るものちようだい。」

と、言いました。

そこで、女の子は、被っていた頭巾を脱いで、子供にやりました。

それから、女の子がまたすこし行くと、
今度出て来た子供は、着物一枚着ずに震えていました。
そこで、自分の上着を脱いで着せてやりました。

それからまたすこし行くと、今度出てきた子供は、
スカートが欲しいというので、女の子はそれも脱いで、やりました。

そのうち、女の子はある森に辿り着きました。

もう暗くなっていましたが、

また、もうひとり子供が出て来て、肌着をねだりました。

あくまで心の素直な女の子は、

(もう真っ暗になつてゐるから
誰にも見られやしないでしきう。

いいわ、肌着も脱いであげることにしましきう。)

と、思つて、とうとう肌着まで脱いで、やつてしましました。

さて、それまでしてやつて、

それこそ、ないといつて、綺麗さっぱりなくなつてしまつた時、
たちまち、高い空の上から、お星さまがバラバラ落ちて来ました。

しかも、それがまつたくの、

チカチカと白銀色をした、ターレル銀貨でありました。

その上、つい今しがた、

肌着を脱いでやつてしまつたばかりなのに、
女の子は、いつのまにか新しい肌着を着ていて、

しかもそれは、

この上なくしなやか麻の肌着がありました。

女の子は、銀貨を拾い集めて、

それで一生豊かに暮らしました。

おしまい

朗読パート終了。

花撫、本を閉じる。

「……どうだつた？」

「ほんと？ よかつたあーっ」

「たしかに、最初はちょっと緊張してたかも。
でも、聞いてくれてる姿を見たら、

……うん、落ち着いた」

「人前で読めて、ちょっと安心した。
付き合つてくれてありがとう」

「……あの、もしよかつたら、
今週末の本番もきてくれない？」

「そばにいてくれたら、

私、今日みたいに落ち着いてできると思う」

「……ふふつ、嬉しい。約束ね」

【EP06：ブランケット キス 優しい眠り】

○図書室（放課後）

あなたは椅子に座っている。

花撫は少し離れて窓際にある。

「（少し遠いところから） 空気、籠つてある。
窓、開けるよー」

花撫、窓を開ける。

秋の風が吹き込んでくる。

「わっ！ 冷たっ……」

花撫、あなたのもとに近づいてくる。

「ちょっと寒いけど、しばらく開けておいていい？
空気、入れ替わるまで」

「（寒さで震えて） はあー……。

先週はまだよかつたのに」

「ね？ 今日、寒いよね？
冬の足音が近づいてる」

「明日から、防寒グッズ増やそうかな。
うん、私、寒がりなの、知ってるでしょ？」

「冬の私、すごいよね。

……家で私、熊って言われてる（笑う）」

「……マフラー、手袋、イヤーマフでしょ？」

タイツは厚手にして……。

あ、カイロは絶対。

お腹にカイロ貼つてないと生きていけない」

「本格的な冬になる前に、ブランケットとか持つてこなきや。図書室って意外と冷えるし」

「……え？」

「ブランケット？ 今、持ってきてるの？」

あなた、鞄からブランケットを取り出す。

「えー！ 可愛い……！ 花柄！
これ、どうしたの？」

「……私のために？ 買ってくれたの？
えー……。嬉しい」

「……ふふつ。

さすが私の恋人。よく知ってる」

「ブランケット、一緒に使いましょ。
こっちの方が、あつたかい」

花撫は、あなたの隣に座る。
二人の膝にブランケットをかける。

「……はあ、いい。あつたかい。
……ふわふわして、気持ちいい」

あなた、本を開こうとする。

そこに声をかける花撫。

「……ねえねえ。

(ふざけながら甘えて) すき。

……すき。

……」つち向いて「

「(キスをして) ……ちゅ。

(口を離す間があつて) ふふふつ。

鼻高い、当たる」

「(キスをして) ……ちゅ」

「……もう少し、長く。

(キスをして) ……ちゅ」

「……ふふふつ。

……きて。

(キスをして) ……ちゅ。

(間を開けて最後、キスをして) ……ちゅ」

「(深呼吸して) ふうー……。

はああ……」

花撫、あなたの肩にもたれ掛かる。

「……私のこと、よくみてるよね。
さりげなく」

「普段は本にしか興味ないって感じなのに」

「そういう優しさ、素敵だと思う」

「……さりげなくじゃない?

……はい。ちゃんと見てくれて、嬉しい」

「最初の印象？ 最初の印象は……。大人しい子。

同じ図書委員なのに、あまり喋ってくれなかつたし

「……うん。まさか付き合うなんて。

思つてなかつた」

「事実は小説より奇なり……なんてね」

花撫、だんだんウトウトしてくる。

「……髪。いい匂いがする」

「うん。好きな匂い」

「……なんか、眠なつてきちゃつた。
昨日、夜更かししゃつて」

「そう、一氣読みしちやつた。
……ちょっとだけ、いい？」

「……うん、ありがとう」